

4.7 [土]	第206回 土曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Saturday Matinée Series, No. 206 Saturday, 7th April, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
4.8 [日]	第206回 日曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Sunday Matinée Series, No. 206 Sunday, 8th April, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮／シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）

Principal Conductor SYLVAIN CAMBRELING P. 6

ヴァイオリン／佐藤俊介 Violin SHUNSKE SATO P. 7

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

ラモール 歌劇〈ダルダニウス〉組曲から [約20分] P. 8
RAMEAU / Excerpts from “Dardanus” Suite

- I. アントレ（第1組曲第1曲） II. タンブーラン（第1組曲第2曲）
III. エール・グラヴ（第1組曲第3曲） IV. エール・ヴィフ（第1組曲第4曲）
V. アントレ（第2組曲第1曲） VI. ロンドー・デュ・ソメイユ（第2組曲第2曲）
VII. ガヴォット・グラシユーズ（第2組曲第3曲） VIII. リゴードン（第2組曲第4曲）
IX. ロンドー・ゲ（第1組曲第5曲）

モーツァルト ヴァイオリン協奏曲 第5番 イ長調 K.219
〈トルコ風〉 [約31分] P. 9

MOZART / Violin Concerto No. 5 in A major, K. 219 “Turkish”

- I. Allegro aperto
II. Adagio
III. Rondeau. Tempo di Menuetto

[休憩 Intermission]

ベートーヴェン 交響曲 第7番 イ長調 作品92 [約36分] P. 10
BEETHOVEN / Symphony No. 7 in A major, op. 92

- I. Poco sostenuto – Vivace
II. Allegretto
III. Presto
IV. Allegro con brio

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[共催] 東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）

4.9 [月]	第18回 読響アンサンブル・シリーズ よみうり大手町ホール／19時30分開演（19時から解説） Yomikyo Ensemble Series, No. 18 Monday, 9th April, 19:30 (Pre-concert talks from 19:00) / Yomiuri Otemachi Hall
---------	--

※出演者と曲目のみ掲載しています。曲目解説は当日別紙を配布予定です。

《長原幸太リーダーによる室内楽》

ヴァイオリン／長原幸太（読響コンサートマスター）、川口堯史、
Violin KOTA NAGAHARA (YNSO Concertmaster), TAKASHI KAWAGUCHI
對馬哲男、外園彩香
TETSUO TSUSHIMA, AYAKA HOKAZONO

ヴィオラ／鈴木康浩（読響ソロ・ヴィオラ）、正田響子
Viola YASUHIRO SUZUKI (YNSO Solo Viola), KYOKO SHODA

チェロ／高木慶太、芝村 崇
Cello KEITA TAKAGI, TAKASHI SHIBAMURA

ナビゲーター／鈴木美潮（読売新聞東京本社 社長直属教育ネットワーク事務局専門委員）
Navigator MISHIO SUZUKI

メンデルスゾーン 弦楽八重奏曲 変ホ長調 作品20 [約33分]
MENDELSSOHN / String Octet in E flat major, op. 20

- I. Allegro moderato ma con fuoco
II. Andante
III. Scherzo : Allegro leggierissimo
IV. Presto

[休憩 Intermission]

エネスコ 弦楽八重奏曲 ハ長調 作品7 [約40分]
ENESCU / String Octet in C major, op. 7

- I. Très modéré
II. Très fougueux
III. Lentement
IV. Mouvement de valse bien rythmée

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

4.13 [金]	第611回 名曲シリーズ サントリーホール／19時開演 Popular Series, No. 611 Friday, 13th April, 19:00 / Suntory Hall
4.14 [土]	第103回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ 横浜みなとみらいホール／14時開演 Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series, No. 103 Saturday, 14th April, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall
4.15 [日]	第9回 パルテノン名曲シリーズ パルテノン多摩大ホール／15時開演 Parthenon Popular Series, No. 9 Sunday, 15th April, 15:00 / Parthenon Tama in Tama-center

指揮／シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）

Principal Conductor SYLVAIN CAMBRELING P. 6

クラリネット／ポール・メイユ Clarinet PAUL MEYER P. 7

特別客演コンサートマスター／日下紗矢子

Special Guest Concertmaster SAYAKO KUSAKA

チャイコフスキー バレエ音楽〈くるみ割り人形〉から [約12分] P. 11

TCHAIKOVSKY / Excerpts from “The Nutcracker”

“行進曲” “トレパック” “こんぺい糖の踊り” “花のワルツ”

モーツァルト クラリネット協奏曲 イ長調 K.622 [約25分] P. 12

MOZART / Clarinet Concerto in A major, K. 622

I. Allegro

II. Adagio

III. Rondo : Allegro

[休憩 Intermission]

ドビュッシー クラリネットと管弦楽のための第1狂詩曲 [約8分] P. 13

DEBUSSY / Première rhapsodie pour clarinette et orchestre

ストラヴィンスキー バレエ音楽〈春の祭典〉 [約33分] P. 13

STRAVINSKY / Le sacre du printemps

【第1部】大地礼賛

I. 序奏 - II. 春のきざしと乙女たちの踊り - III. 誘拐 - IV. 春のロンド -

V. 敵の都の人々の戯れ - VI. 賢人の行列 - VII. 大地への口づけ - VIII. 大地の踊り

【第2部】いけにえ

I. 序奏 - II. 乙女たちの神秘的な集い - III. いけにえの賛美 -

IV. 先祖の呼び出し - V. 先祖の儀式 - VI. いけにえの踊り

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団（4/13、14）

多摩市文化振興財団、読売日本交響楽団、読売新聞社（4/15）

[協力] 横浜みなとみらいホール（4/14）

※4月13日の公演では日本テレビ「読響シンフォニックライブ」の収録が行われます。

4.20 [金]	第577回 定期演奏会 サントリーホール／19時開演 Subscription Concert, No. 577 Friday, 20th April, 19:00 / Suntory Hall
----------	--

指揮／シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）

Principal Conductor SYLVAIN CAMBRELING P. 6

コンサートマスター／小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

アイヴズ ニューイングランドの3つの場所（Version 4） [約19分] P. 15

IVES / Three Places in New England

I. ボストン・コモンセント＝ゴードンズ

II. コネティカット州レディングのパトナム將軍の兵営

III. ストックブリッジのフーサトニック川

[休憩 Intermission]

マーラー 交響曲 第9番 ニ長調 [約81分] P. 16

MAHLER / Symphony No. 9 in D major

I. Andante comodo

II. Im Tempo eines gemächlichen Ländlers

III. Rondo - Burleske. Allegro assai. Sehr trotzig

IV. Adagio. Sehr langsam und noch zurückhaltend

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[協力] アフラック

シルヴァン・カンブルラン

(常任指揮者)
Sylvain Cambreling

9年間の想いを胸に
充実の3プログラム

これまで読響を率いてきたマエストロの常任最終シーズンが幕を開ける。今回はラモーからベートーヴェン、マーラー、ストラヴィンスキーまで、幅広いレパートリーを有するマエストロの魅力を存分に活かしたプログラムが並んだ。

1948年フランス・アミアン生まれ。これまでにブリュッセルのベルギー王立モネ歌劇場の音楽監督、フランクフルト歌劇場の音楽総監督、バーデンバーデン&フライブルクSWR(南西ドイツ放送)響の首席指揮者を歴任し、現在はシュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督とクラゲフォーラム・ウィーン的首席客演指揮者を兼任するほか、2018年秋からはハンブルク響の首席指揮者への就任が決まっている。また、巨匠セルジュ・チェリビダッケの後任として、ドイツ・マイ^{しょうへい}ントツのヨハネス・グーテンベルク大学で指揮科の招聘教授も務める。



客演指揮者としてはウィーン・フィル、ベルリン・フィルを始めとする欧米の一流楽団と共演しており、オペラ指揮者としてもザルツブルク音楽祭、メトロポリタン・オペラ、パリ・オペラ座などに数多く出演している。

昨年11月に読響と披露した歌劇〈アッシジの聖フランチェスコ〉(演奏会形式)は、『音楽の友』誌の「コンサート・ベストテン2017」で第1位に選出されるなど絶賛された。

最終シーズンへ向け、「9年間の集大成として、バロックから現代まで約250年の歴史を辿^{たど}ります。常に新しいものを見出し、さらなる高みを目指したい」と意気込みを語っている。



©Yat Ho Tsang

ヴァイオリン 佐藤俊介

Violin Shunsuke Sato

幅広いレパートリーと、モダンからピリオドまで多彩な演奏スタイルを手中に収めて活躍する国際派。現在コンサートマスターを務めているオランダ・バッハ協会の音楽監督に今年6月に就任する。1984年生まれ。幼少期に渡米し、カーティス音楽院などで学ぶ。現在、オランダのデン・ハーグ在住で、ドイツのコンチェルト・ケルンのコンサートマスターも務める。これまでにバイエルン放送響、マリインスキー歌劇場管などと共演。使用楽器は2007年及び09年パリ製シュテファン・フォン・ベア。読響とは2年ぶりの共演。

◇ 4月7日 土曜マチネシリーズ
◇ 4月8日 日曜マチネシリーズ



©Shin Yamagishi

クラリネット ポール・メイエ

Clarinet Paul Meyer

名実ともに世界のトップに立つクラリネット奏者が読響初登場。1965年アルザス生まれ。パリ高等音楽院とバーゼル音楽院で学び、84年にニューヨーク・デビュー。トゥーロン国際コンクールで優勝し、リヨン歌劇場とパリ・オペラ座の首席奏者として活躍後、ソロ活動に専念。協奏曲のレパートリーは約100曲にのぼり、室内楽でもクレメル、ヨーヨー・マらと共演。パユやルルーら現代最高のフランス木管奏者たちと「レ・ヴァン・フランセ」を結成し人気を博す。CDも多数のレーベルからリリース。近年は指揮者としても活躍している。

◇ 4月13日 名曲シリーズ
◇ 4月14日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
◇ 4月15日 パルテノン名曲シリーズ

4.7 [土]

4.8 [日]

道下京子 (みちした きょうこ)・音楽評論家

ラモー 歌劇〈ダルダニウス〉組曲から

作曲：不明／初演：1739年11月19日、パリ／演奏時間：約20分

ジャン＝フィリップ・ラモー（1683～1764）は、フランスのバロック期の作曲家で、理論家としても知られた。

ラモーのこの作品は、ラ・プリュエルの台本に作曲された音楽悲劇で、古代ギリシャを舞台とする。プリュグア国のトゥセールは、ユピテル（ジュピター）の息子ダルダニウスと戦争をしている。トゥセールは隣国のアンテノールに、娘のイフィーズを嫁がせることを約束していた。しかし、ダルダニウスは魔術師の力でイフィーズと会い、愛を確かめる。トゥセールに攻撃されるもダルダニウスはヴィーナスの力によって救われ、ほかの神々も加勢する。そこに怪物が現れてトゥセールを襲うが、それをダルダニウスが倒す。そして二人は和解し、ダルダニウスはイフィーズと結ばれる。

作品は5幕構成で、その劇中で用いられる音楽から組曲が編まれている。なお、カンブルランは曲順を変え、第1組曲の第5曲を第2組曲のあとに置く。入場を表す“アントレ”に始まり、バレエ舞曲が組曲の形でまとめられている。

【第1組曲】 第1曲 アントレ ニ短調／第2曲 タンブーラン ニ長調／第3曲 エール・グラヴ（重々しいエア） 変ロ長調／第4曲 エール・ヴィフ（急速なエア） 変ロ長調

【第2組曲】 第1曲 アントレ ト短調／第2曲 ロンドー・デュ・ソメイユ（眠りのロンド） ト短調／第3曲 ガヴォット・グラシユーズ（愛想のよいガヴォット） ト長調／第4曲 リゴードン ト長調

【第1組曲】 第5曲 ロンドー・ゲ（陽気なロンド） ニ長調

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、ファゴット2、打楽器（プロヴァンス太鼓）、弦五部

モーツァルト ヴァイオリン協奏曲 第5番 イ長調 K.219 〈トルコ風〉

作曲：1775年12月20日／初演：不明／演奏時間：約31分

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）は、幼い頃からザルツブルクの宮廷で音楽家として活動。父レオポルトの教育方針から、パリやロンドンなどへの旅行に続き、3回のイタリア旅行によって幅広い音楽の経験を積み、1773年頃から彼は新たな創作の段階に入る。モーツァルトが完成させた5曲のヴァイオリン協奏曲もそのひとつ。5曲ともにザルツブルク時代の一時期に集中的に作曲している。第1番（K.207）は1773年の作品であるが、ほかの4曲は1775年に書き上げられた。これらの協奏曲の成立事情を示す資料はないものの、モーツァルト自身、あるいはザルツブルク宮廷楽団のコンサートマスターを務めていたアントーニョ・ブルネッティのために作曲されたと考えられている。

ヴァイオリン協奏曲第5番は、軽やかな表現を特色とするフランスのギャラント様式に基づいている。また、この作品は〈トルコ風〉とのタイトルをもつ。モーツァルトのこの種のタイトルは、ピアノ・ソナタ K.331 の第3楽章「トルコ行進曲」（1783年）やジングシュピール〈後宮からの誘拐〉（1782

年）などにもみられる。当時のウィーンは、オリエンタルな趣味が流行し、この協奏曲の楽想も、トルコの軍楽隊の音楽が背景となっている。

第1楽章 アレグロ・アペルト イ長調。オーボエとホルン、弦楽器のトゥッティは、活気に満ちあふれ、この楽章の雰囲気を決定づけている。力強く登ってゆくような第1主題、そして第2主題は愛らしい楽想をもつ。その後、独奏ヴァイオリンの優美な趣が印象的な、短いアダージョの部分を挿入する。

第2楽章 アダージョ ホ長調。緩やかに揺らぐ美しい主題を、まず第1ヴァイオリンが表し、独奏ヴァイオリンが伸びやかに歌い継ぐ。ほのかな翳りを帯びた中間部でも、独奏ヴァイオリンは息の長いメロディを綿々と歌い上げてゆく。

第3楽章 ロンド：テンポ・ディ・メヌエット イ長調。ロンド形式的なメヌエット。付点のリズムを伴う典雅な主題を、独奏ヴァイオリンが奏でる。途中でイ短調に転じる部分での、オリエンタルな趣の躍動的な表現が「トルコ風」と呼ばれるゆえんである。

楽器編成／オーボエ2、ホルン2、弦五部、独奏ヴァイオリン

ベートーヴェン 交響曲 第7番 イ長調 作品92

作曲：1811～12年／初演：1813年12月13日／演奏時間：約36分

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）は、1792年に故郷のボンを離れ、ウィーンへと移り住み、ハイドンやアルブレヒツベルガーらに作曲の基礎を学んだ。

1800年に交響曲第1番を発表したベートーヴェンは、作曲の新たな可能性を模索する。その課程で重要な作品は、1804年初演の交響曲第3番〈英雄〉と1808年初演の交響曲第5番〈運命〉および第6番〈田園〉である。その後、ベートーヴェンの作風は変化してゆく。交響曲第5番では、それまでの伝統的なソナタ形式を集約的な姿で示し、第6番ではロマン派を先取りした標題交響曲の創作を手掛けたのに対し、第7番はそれらの交響曲のもつモニュメンタルな性格とは異なる。彼はこの作品ではもっと自由な表現を求めており、作品に登場するそれぞれの主題はとても個性的である。

この作品はナポレオン戦争とも深い結びつきをもつ。ハーナウでの戦いでの傷病兵のための慈善演奏会で、戦争音楽として知られている〈ウェリントンの勝利〉とともに初演され、聴衆に大きな感動を与えた。この作品は、リズムが重要な表現手段となっている。ワーグナーは作品全体を「舞踏の聖化」と呼び、ベルリオー

ズは第1楽章に農民の舞踏を指摘している。

第1楽章 ポコ・ソステヌート～ヴィヴァーチェ イ長調。明るい雰囲気、漂う楽章。ゆったりとした序奏ののち、付点のリズム動機に導かれてフルートが第1主題を示す。ホ長調の旋律的な第2主題を、ヴァイオリンが奏でる。

第2楽章 アレグレット イ短調。A-B-A-B-Aの形式で書かれており、木管楽器が主和音を鳴り響かせたのち、弦楽器が主旋律を表す。イ長調に変わると、クラリネットとファゴットがヴァイオリンによるアルペジオの波に包まれながらメロディを優美に歌い上げてゆく。この楽章では、同じリズムが繰り返し用いられ、そのリズムを軸に多彩なオーケストレーションが施されている。

第3楽章 プレスト ヘ長調。軽快なスケルツォ主部に続き、トリオではヴァイオリンがA音(＝ラ)を鳴り響かせるなか、木管楽器とホルンがトリオ主題を表す。

第4楽章 アレグロ・コン・ブリオ イ長調。生彩に富んだ第1主題を第1ヴァイオリンが奏でる。ソナタ形式と捉えることができ、弱奏の第2主題も第1ヴァイオリンが提示。長いコーダののち、音楽は熱狂的に結ばれる。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

4.13 [金]

4.14 [土]

4.15 [日]

飯尾洋一（いいお よういち）・音楽ライター

チャイコフスキー

バレエ音楽〈くるみ割り人形〉から “行進曲” “トレバック” “こんぺい糖の踊り” “花のワルツ”

作曲：1891～92年／初演：1892年12月18日（新暦）、サンクトペテルブルク、マリインスキー劇場／演奏時間：約12分

ピョートル・チャイコフスキー（1840～93）は1891年、帝室劇場からバレエとオペラを組み合わせた二本立ての作品の依頼を受けた。これにこたえて、バレエ音楽〈くるみ割り人形〉とオペラ〈イオランタ〉が作曲された。

〈くるみ割り人形〉の原作は、E. T. A. ホフマンの童話「くるみ割り人形とねずみの王様」。クリスマスイブに少女クララはくるみ割り人形をプレゼントされる。みんなが寝静まった夜の12時、みるみるうちに体が小さくなったクララは、おもちゃの兵隊たちに加勢して、ネズミの軍勢に勝利する。すると、くるみ割り人形はステキな王子様に変身。ふたりはお菓子の国へと旅立ち、魔法の城でさまざまな精たちの踊りで歓待される……。バレエとしても管弦楽曲としても屈指の人気を誇る名作である。

“行進曲” 子供たちがクリスマスツリ

ーを巡って踊る愛らしい行進曲。弾むようなリズムの金管楽器と弦楽器の応答が、浮き立つ気分を表現する。

“トレバック”（ロシアの踊り） スピード感あふれるダイナミックな舞曲。プレスティッシモの結尾まで一気呵成に駆け抜ける。

“こんぺい糖の踊り” 弦楽器のピッツィカートに乗って、チェレスタが幻想的なメロディを奏でる。パリで発明間もないチェレスタに出会った作曲者は、すぐにこの楽器の購入を友人に依頼し、「だれにもチェレスタを見せないでほしい。特にリムスキー＝コルサコフやグラズノフには。この楽器は私が最初に使うのだから」と書いている。

“花のワルツ” ハープが活躍する夢幻的な序奏に続いて、優美なワルツが奏でられる。曲は次第に熱を帯び、壮麗なクライマックスを築きあげる。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（シンバル、タンブリン、トライアングル）、ハープ、チェレスタ、弦五部

モーツァルト クラリネット協奏曲 イ長調 K.622

作曲：1791年／初演：不明／演奏時間：約25分

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）が、生涯で唯一となるクラリネット協奏曲を完成させたのは1791年の10月のこと。この後、2か月足らずでモーツァルトは35歳にして世を去ることになる。最後の年に書かれた作品は、ほかに弦楽五重奏曲第6番変ホ長調、歌劇〈魔笛〉、歌劇〈皇帝ティトゥスの慈悲〉、未完のレクイエム等々。モーツァルトの創作力は驚異的に高まっていた。

作品は友愛結社フリーメイソンの盟友であり友人でもあった当時のウィーンを代表する名手アントン・シュタットラーのために書かれた。モーツァルトはシュタットラーの演奏に触発されて、それまでにもクラリネット五重奏曲K.581などを作曲している。

第1楽章は、1787年から90年の間に作曲されたバセットホルン（通常よりも音域の低いクラリネット属の木管楽器）のための協奏曲の断片から改作された。シュタットラーはクラリネットの低音域に愛着を感じていたようで、低音域を拡張した特別なクラリネットを使用していた。おそらくはこの作品もシュタットラーの楽器のために書か

れたと推定されるが、自筆譜は消失しており、通常のクラリネットのための編曲によって現在まで伝わっている。

独奏者の華やかな名技が披露される一方で、作品全体に晩年のモーツァルト特有の澄み切った叙情が横溢する。オーケストラは、オーボエを欠いているのが特徴的。簡潔な管楽器の編成が、透明感のある柔らかい響きを生み出す。

第1楽章 アレグロ 清澄で晴れ晴れとしたオーケストラのみによる主題提示に続いて、クラリネットが登場して陰影豊かなソロを奏でる。明朗さのなかに愁いを帯びた表情がにじみ出る。

第2楽章 アダージョ 全曲の白眉ともいえる絶美の音楽。クラリネットのふくよかでまろやかな音色が最大限に生かされ、息の長い旋律がたっぷりと歌われる。

第3楽章 ロンド、アレグロ 楽しい話しかけるような独奏クラリネットの愛らしい冒頭主題で開始され、オーケストラがこれに応答する。自在のソロが軽やかに飛翔するが、しばしば短調に傾いて寂寥感を漂わせる。

楽器編成／フルート2、ファゴット2、ホルン2、弦五部、独奏クラリネット

ドビュッシー クラリネットと管弦楽のための第1狂詩曲

作曲：1909～10年／初演：1910年（原曲）、1919年（管弦楽版）、パリ／演奏時間：約8分

1909年、クロード・ドビュッシー（1862～1918）はパリ音楽院長のフォーレに請われて音楽院の上級評議会に加わるようになった。卒業試験の審査にも携わるようになったドビュッシーは、1909年末から10年にかけて、クラリネット科の卒業試験の課題曲として二つの作品を作曲した。一曲はクラリネットとピアノのために書かれた狂詩曲（ラブソディ）第1番であり、もう

一曲は初見用のクラリネットとピアノのための「小品」であった。

狂詩曲第1番は卒業試験に使用された後、作曲者自身により独奏クラリネットとオーケストラ用に編曲されることとなった。

試験の課題曲として書かれただけに技巧性に富む一方で、〈牧神の午後への前奏曲〉を思わせるような淡く豊かな叙情性を湛える。

楽器編成／フルート3、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット3、ホルン4、トランペット2、打楽器（シンバル、トライアングル）、ハープ2、弦五部、独奏クラリネット

ストラヴィンスキー バレエ音楽〈春の祭典〉

作曲：1910～13年／初演：1913年5月29日、パリ、シャンゼリゼ劇場／演奏時間：約33分

もしもタイムマシンに乗って名曲の初演に立ち会えるのなら、まっさきに訪れたいのがイーゴリ・ストラヴィンスキー（1882～1971）のバレエ音楽〈春の祭典〉初演の舞台だ。1913年、シャンゼリゼ劇場での初演は音楽史に残る大事件となった。

作曲者自身の回想によれば、作品はつかの間の幻影をきっかけに生まれた。厳かな異教の祭典で、輪になって座った長老たちが、死ぬまで踊り続け

る若い娘を見守る。娘は神に捧げるいけにえとして選ばれたのだ。ストラヴィンスキーがそのイメージを伝え、ロシア・バレエ団の興行主セルゲイ・ディアギレフはたちまちこの着想に夢中になった。舞台美術をニコライ・レーリヒ、振付をヴァーツラフ・ニジンスキーが務め、ピエール・モントゥーが指揮した。

あまりに斬新なニジンスキーの振付とストラヴィンスキーの音楽は劇場に

4.20 [金]

船木篤也 (ふなき あつや)・音楽評論

アイヴズ
ニューイングランドの3つの場所作曲：第1曲：1911～23年、1929年改訂。第2曲：1912年。第3曲：1908～1914年／
初演：1930年2月16日、ニューヨーク／演奏時間：約19分

ニューヨークで保険会社を営むかわら作曲を続けた米国人、チャールズ・アイヴズ (1874～1954)。ウィーンほかで指揮業につきながら作曲を続けたユダヤ人、グスタフ・マーラー (1860～1911)。本日ならべて聴くこのふたりには、しかし共通点もある。伝統的な管弦楽の素地に、しばしば軍楽や俗謡のたぐいを「闖入」させるのだ。異質な音楽が、同時に、しかも多くの場合、拍子や調を違えて響くので、印象はひじょうに多層的で現代的。後年ニューヨークに移ったマーラーは、当地でアイヴズの存在を知り、交響曲第3番 (1904年) のコピーを所望したという。より多層的な〈ニューイングランドの3つの場所〉をも知り得たなら、どう反応していただろうか。

第1曲 ボストン・コモンのセント＝ゴードンズ 南北戦争時の最初の黒人歩兵連隊。その記念レリーフが、ボ

ストン市の公園「ボストン・コモン」にある。その印象。聞こえてくる断片は〈ジョージア行進曲〉など。「セント＝ゴードンズ」は、レリーフの作者名。**第2曲** コネティカット州レディングのパトナム将軍の兵営 アメリカ独立戦争時の陸軍将軍、イズラエル・パトナム。彼が冬に野営を敷いた場所は、現在記念公園となっている。そこで独立記念日の祝典が催されている中、ある子どもがまどろみ、夢をみる。夢には自由の女神、パトナム、兵士たちが現れ――。〈ヤンキー・ドゥードル〉ほか、米国歌の断片なども聞こえる。**第3曲** ストックブリッジのフーサトニック川 曲名と同じ題を持つ詩 (R. A. ジョンソンによる) が楽譜に掲げられているが、もともっているのはアイヴズ自身の新婚旅行中の体験。のどかな雰囲気の中、川の向こうから賛美歌が聞こえる。

大きな混乱を巻き起こした。最初の数小節ですぐに嘲笑が起き、作曲者は席を立った。演奏中に野次とブーイングが飛び交い、それに対抗するブラヴォーの声が叫ばれ、観客同士の争いを引き起こした。舞台袖ではニジンスキーが「16、17、18!」と金切り声をあげながら拍子をとっていたが、怒りをあらわにする観客たちが騒がしすぎてダンサーたちは何も聞こえない。曲が終わる前に警官隊が駆けつけた頃には、ストラヴィンスキーは舞台裏の窓から外に逃げていたという。

第1部「大地礼賛」 冒頭、ファゴットの高音域による“序奏”はいかにも異教的な雰囲気を醸し出すが、これはリトアニア民謡“Tu mano seserėle (私の妹よ)”を引用したもの。

“春のきざしと乙女たちの踊り”では、弦楽器の連打に不規則なアクセントが添えられ、これにさまざまなメロディが重層的に絡み合う。複雑に拍子に変化する凶暴な“誘拐”を経て、“春のロンド”ではフルートのトリルを伴奏にクラリネットがゆっくりとした典礼風の旋律を奏で、弦楽器による引きずるような重々しい主題が続く。次第に曲は高潮し、荒々しい頂点を築く。ティンパニの勇猛な連打から“敵の都

の人々の戯れ”に突入し、緊迫感を高めつつ“賢人の行列”へと続く。大音響の後、“大地への口づけ”で一瞬の静寂が訪れ、すぐに熱狂的な“大地の踊り”が開始される。鋭い警鐘のようなトランペットを交えながら、躍動感あふれる爆発的なエンディングへと突き進む。

第2部「いけにえ」 静まり返った夜の気配を“序奏”で漂わせ、“乙女たちの神秘的な集い”が続く。淡々とした対話は突如として遮られ、衝撃的な11拍子の連打を経て目まぐるしく拍子を変化させる“いけにえの賛美”へと続く。金管楽器の野蛮なコラールとでもいうべき“先祖の呼び出し”から、不気味な“先祖の儀式”が執り行われる。妖しい呪文が次々と唱えられるかのよう。白熱した儀式はやがて静まり、ファゴットの唐突な下行音型で遮られる。“いけにえの踊り”でいよいよ異教の儀式は最後の段階へと入る。変則的で暴力的なリズムが次第に興奮を高めてゆく。いけにえの乙女は自らを太陽神に捧げてついに息絶える。刹那の沈黙の後、斧で断ち切るような激しい一撃で曲を閉じる。

楽器編成／フルート3 (ピッコロ持替)、ピッコロ、アルトフルート、オーボエ4 (イングリッシュ・ホルン持替)、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3 (バスクラリネット持替)、バスクラリネット、エスクラリネット、ファゴット4 (コントラファゴット持替)、コントラファゴット、ホルン8 (ワーグナーチューバ持替)、ピッコロトランペット、トランペット4、バストランペット、トロンボーン3、チューバ2、ティンパニ2、打楽器 (大太鼓、シンバル、トライアングル、アンティーク・シンバル、タンブリン、ギロ、銅鑼)、弦五部

マーラー 交響曲 第9番 ニ長調

作曲：1909～10年／初演：1912年6月26日、ウィーン／演奏時間：約81分

マーラーが完成させ得た最後の交響曲。マーラーは1907年に、10年間つとめたウィーン宮廷歌劇場の監督業を辞し、その後ニューヨークに活動の拠点を移していた。メトロポリタン歌劇場、ニューヨーク・フィルの指揮者として多忙な生活を送るなか、夏季になると欧州に渡り、南チロルの避暑地で創作にいそしみ、米国に戻ってから午前中を作曲にあてるなどして本作を完成させた。だが、マーラーがこれを自分の耳で聴く機会は、ついに訪れなかった。1911年5月18日、50歳でウィーンにて息を引き取ったのである。

マーラーとアイヴズが違う文化圏にいながら、異質なものを同時進行させるという似通ったアイデアを抱いたことは、すでに述べた。あるいは両者は、ともに「統一」や「秩序」を音楽作法の至上命題としなかった、と言ってよいかもしれない。この第9交響曲も、そんなモザイク的側面を含むが、同時に、マーラーがそれまでに書いたどんな音楽とも異なっている。

とりわけ第1楽章だ。冒頭に耳を澄まそう。交響曲に「主題」はつきものだが、ここで鳴っている音のどれが主題なのか？ 一番最初の、チェロとホ

ルンが交互に繋いでゆく、シンコペーションを含んだ不整脈を思わせるようなモチーフ①だろうか？ それとも、その直後にハーブがつまびく、教会の鐘のような4音②だろうか？ まわりでは切れ切れの音が去来し、そんな中からやっと旋律らしい旋律が現れるも、音程を2度下がるフレーズ③が何度も繰り返され、なにやら歌いよどんでいるみたいだ。

そう、マーラーはここで、常識的な主題提示にあえて逆らってみせているのである。断片を断片のまま放り出し、鳴らす楽器を刻一刻と変えて、音色も持続させるのではなく、細分化する。そしてそれら断片が、気がつけば、あるまとまりの中に組み込まれている——こうなるとこちらは、極度に耳をそばだてるほかない。オーケストラ音楽の、まったく新しい聴き方だ。

また本作は、楽章の並びをみても、まことに風変わり。全4楽章というのは古典派にならったようにみえるが、両端にゆっくりとした楽章を置くのは、まったく非古典的。1. ニ長調、2. ハ長調、3. イ短調、4. 変ニ長調という主調の並びも、反伝統的だ。

いっぽうでマーラーは、どんなに新

しい書き方をしようと、ベートーヴェン以降のドイツの交響曲の伝統を、まったく無視したわけではなかった。キーワードは「関連性」となるだろう。

第1楽章 アンダンテ・コモド 先に挙げた冒頭の断片のうち、下行2度の③に注目しよう。マーラーは本作の前に、厭世的な漢詩に基づいた声楽付き管弦楽曲〈大地の歌〉を書いているが、その終楽章の最後にも、同じ下行2度の繰り返しがあつた。そこには、「とこしえに、とこしえに」という歌詞があてられており、これは限りある人間の生に対置したときの自然の悠久をいていた。この第9交響曲ではどうか？ ③は本楽章中、何度も現れ、最後にいたってオーボエによって長く引き延ばされる。マーラーはスケッチの段階で、この箇所「さらば！」という書き込みをしているのだ。「とこしえに」と思い合わせれば、③は永遠なる自然・この世への別離の辞ととれなくもない。こうしてみると、本楽章のクライマックスで③がホルンによって強奏されるのも、なにやら意味深長。その際ほぼ同時に、トロンボーンとチューバが①を、ティンパニが②を強奏しているだけに。

第2楽章 ゆったりとしたレントラー風のテンポで。いくぶん不器用に、

かつとても粗野に。種々の舞曲（のパロディ）をとり入れた世俗的な音楽。不器用と粗野が身上のレントラー（A）、テンポを速めたワルツ（B）、非常にゆっくりしたレントラー（C）が、A-B-C-B-C-A-B-C-Aとめまぐるしく交代する。本楽章にも、冒頭部ほか、さまざまな所に③の下行2度が埋め込まれている（関連性）。

第3楽章 ロンド、ブルレスケ。アレグロ・アッサイ。きわめて反抗的に。ブルレスケは「茶番」の意。猪突猛進に駆け抜けるが、途中、天国の扉がとつぜん開いたかのような部分がある（高弦のトレモロとハーブが印象的）。ここに頻出する回音（主要音の上の音に始まり、下の音を経て、主要音に戻る④）は、第4楽章で最も重要になってくる。また「猪突猛進」の部にも、実はすでに潜んでいたものである（関連性）。

第4楽章 アダージョ。非常に遅く、ただし控えめに。④を含んだ旋律で始まる、平安と祈りにみちた弦楽主体の音楽。クライマックスで天に届けとばかりに叫びを上げるヴァイオリン群の音形は、①のようにも聴こえる。終結部を、マーラーの弟子で指揮者だったブルーノ・ワルターは「青空に溶け入る白い雲のよう」と評している。

楽器編成／フルート4、ピッコロ、オーボエ4（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット4（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ2、打楽器（グロックンシュピール、銅鑼、トライアングル、小太鼓、シンバル、大太鼓、鐘）、ハーブ2、弦五部